

ドイツ社会民主党の教育政策に関する 文献・史料紹介

北九州大学 有 吉 英 樹

はじめに

政党の教育政策史を研究しようとする場合、我々は、特定の個人を対象として彼の教育思想や教育実践に関して研究する場合とは大いに異なり、多くの困難に直面しなければならない。言うまでもなく、まずその政党に属し党の教育思想の形成や教育政策の策定の分野において活躍した多くの人たちの、思想と実践の両面にわたる歴史的な軌跡を追求しなければならない。しかも、或る党員の掲げる教育思想や教育政策は常に変化して定まらないばかりか、他の党員たちのそれと互いに著しく相違し、或いは激しく対立する場合も歴史的に多く見受けられる。さらに、政党の政治的社会的な活動と教育活動との関連性はもちろんのこと、他の諸政党との対立や闘争、妥協等の内容およびその根拠についても、歴史的社会的状況をたえず踏まえながら研究し考察していくことが必要だからである。

先に述べたことを、ドイツ社会民主党（SPD）にあてはめて考えてみよう。SPDはドイツ共産党（KPD）と並んで、ドイツ労働運動の指導政党として栄光と誤謬に彩られた歴史を綴ってきた。

SPDの歴史的源流は古く、A. ベーベル（Bebel）、W. リークネヒト（Liebknecht）等によって1869年に結成された社会民主労働者党が一応の起点と考えられる。この時決議されたアイゼナッハ綱領は、「教会と学校の分離」「無償教育」「児童労働の禁止」等を掲げている。1875年には社会民主労働者党と全ドイツ労働者協会が合同して社会主義労働者党が結成され、ゴータ綱領を決議した。社会主義労働者党は1890年にSPDと改称し、翌年エルフルト綱領を定めた。これら各々の綱領の中に謳われている教育政策・教育要求は一貫性に欠けており、社会主義的教育理念に基づく内容とは言えない傾向をもっていた。党の活動全体からすれば、教育問題は未だ付随的な課題にすぎなかった。

19世紀末から第一次世界大戦期にかけて、SPDの内部では理論と行動の両面において3つの潮流が対立を深めていた。改良主義および修正主義を主張する右派には、G. フォルマル（Vollmar）や、F. エーベルト（Ebert）、E. ベルンシュタイン（Bernstein）等がこれに属した。左派に属したK. リークネヒト（Liebknecht）、R. ルクセンブルク（Luxemburg）、F. メーリンク（Mehring）、C. ツェトキン（Zetkin）、H. シュルツ（Schulz）等は、政権獲得闘争と労働者の地位向上のための闘争を結びつけて把握し、教育政策活動に熱心に取り組んだ。右派と左派の中間に、党首A. ベーベル（Bebel）と理論家K. カウツキー（Kautsky）がいた。

党内で教育問題にもっとも強い関心と識見をもっていたC. ツェトキンとH. シュルツは、社会主義的な教育理念と教育政策を党大会で論議する必要性と意義を強調し、1906年のマンハイム党大会において彼ら二人は、「国民教育と社会民主主義」のテーマで趣意文を提出し基調演説を行った。その後、1914年帝国議会においてSPD議員団（彼らの殆どが党内右派であった）が「戦時公債案」に対して賛成投票を行った時、H. シュルツは彼ら右派にすでに身を寄せ、戦争の積極的な支持者に転じていた。他方、C. シェトキン、R. ルクセンブルク、K. リープクネヒト、F. メーリンク、W. ピーク (Pieck) 等は、戦争遂行政策に賛成するSPD指導部を批判し、1917年には中央派内左派と一緒に独立社会民主党 (USPD) を結成し、さらに1918年末にKPDを創立した。

1919年に行われたワイマール憲法制定国民議会選挙の結果、SPD、中央党、ドイツ民主党の3党による連合政権が誕生し、SPDは政権与党として教育立法や学制改革に影響力を及ぼした。1923年に下野したSPDは1928年の総選挙で最大議席を獲得し、中間諸政党との大連立内閣を成立させたけれども、1933年ヒトラーが政権をとった2カ月後にSPDは解散させられた。この間SPDは1921年にゲルリッツ綱領を、1925年にはハイデルベルク綱領を決議している。前者はエルフルト綱領とは異なり階級闘争には言及せず、国民政党としての性格を明らかにしている。前者に代わるものとしてのハイデルベルク綱領は再び階級闘争を重視する立場を打ち出している。ワイマール時代においてもSPDは党の基本的方針自体が揺れ動き、KPDと協調することはごく稀であって、教育政策・学政改革をめぐる、中央党やドイツ民主党等と妥協する道を歩んだ。

さて、SPDの変転めまぐるしい歴史を極めて簡単に素描してみたが、革命観や階級観、国家権力の性格に対する理解の仕方、大衆運動・労働運動理論等々をめぐる、SPD党内の諸潮流の対立・論争は非常に複雑でしかも変化に富んでいる。SPDのそれらの政治的な理論および運動との関連において、SPDの教育理念、教育政策、教育要求等がどのように創造され、そしてそれが実際にどのようにどの程度実現されたのか、その歴史的意義と限界は奈辺にあるのか、これらの問題を個別的なテーマの下での考察ではなくて、歴史的総括的に考察することは、前述したSPD史素描からも推察していただけると思うけれども、東西両ドイツにおいてさえ今日なお、至難な追究課題であると言えよう。

とはいえ、東ドイツにおいてはマルクス主義の立場に立った教育史研究が着実に進められ、KPDやSPDの教育理念や教育政策、そして労働運動の中で主張され展開された教育理念、教育政策、教育要求等々を究明する努力が続けられている。その場合、やはりSPDの果たした役割に対してはきびしい批判的な評価が顕著である。他方、西ドイツにおいては「ドイツ労働運動が創造した社会主義的教育学と教育政策は、黙殺と排斥の長い時代を経て後」「陽の目を見るようになり」（後掲、I, の(3)、9頁）、近年、数々の研究成果が発表されている。

本稿では、SPDの草創期からワイマール共和国の時代におけるSPDの教育思想、教育政策、教育要求等に関する研究物の中で特に重要と思われるものを、I. 著書、II. 寄稿論文、学位論文、III. 史料、に大別して紹介したいと思う。なお筆者の見落している価値ある文献・史料も少なくないのではないかと思われる。御寛恕と御教示をぜひお願いしたい。

I. 著 書

(1) Gerd Hohendorf: Die pädagogische Bewegung in den ersten Jahren der Weimarer Republik. Volk und Wissen Verlag. S. 192. 1954.

(2) Horst Diere: Rechtssozialdemokratische Schulpolitik im Dienste des deutschen Imperialismus. Der Geschichtsunterricht an den höheren Schulen Preußens zwischen 1918 und 1923 im Zeichen des Klassenverrats der rechten SPD-Führung. Volk und Wissen Verlag. S. 222. 1964.

(1)は、ワイマール時代初期における教育改革の経緯とその特質を教育政策、教育思想、教育方法等の分野にまたがってマルクス主義の立場から分析し考察した先駆的な労作と言える著書である。KPDやSPD右派による教育政策活動についても詳しく論述している。(2)の著書はワイマール時代初期において、主に中等教育段階の歴史教育の分野でSPDの右翼的指導者たちが、帝国主義のイデオロギーを支持擁護する役割を果たしたことを究明している。

(3) Karl Christ: Sozialdemokratie und Volkserziehung. Die Bedeutung des Mannheimer Parteitags der SPD im Jahre 1906 für die Entwicklung der Bildungspolitik und Pädagogik der deutschen Arbeiterbewegung vor dem Ersten Weltkrieg. Peter Lang Frankfurt/M. S. 298. 1975.

本書は、1906年社会民主党マンハイム党大会において、C. ツェトキンとH. シュルツが「国民教育と社会民主主義」と題して執筆し提出した6つの「趣意文」、および社会主義の教育思想と教育政策に関して二人が行った「基調演説」に焦点をあてて多角的に考察したものである。著者は本書の執筆に際して、社会民主主義に関わりのあった人々の著わした膨大な数の文献に目を通すとともに、当時発刊されていた様々の機関誌紙に掲載された論文や論評の類も実に丹念に調べあげている。彼は西ドイツの教育史研究者の間では従来、ほとんど陽の当てられていなかった社会民主主義の文献・史料を視野に収め、その広範にわたる調査研究を背景にしつつ、「趣意文」と「基調演説」の内容を分析考察し、さらにマンハイム党大会がその後の教育政策、教育運動、教育行政にどのような影響を及ぼしていったのかについても追求している。K. クリストによってSPDの教育政策史における、ひいてはドイツ教育史におけるマンハイム党大会のもつ位置と意義が初めて明らかにされたと言っても過言ではあるまい。なお、1906年以降、H. シュルツが党内左派から中央派へ、さらに右派へと変質していった具体的な過程については、十分に解明されていない恨みが少々残る。

(4) Wolfgang W. Wittwer: Die sozialdemokratische Schulpolitik in der Weimarer Republik. Ein Beitrag zur politischen Schulgeschichte im Reich und in Preußen. Colloquium Verlag. S. 435. 1980.

「ワイマール時代におけるドイツ社会民主主義の学校政策の研究は『教育学と歴史学の交差領域』にある」ととらえる著者は、自らの研究を他の精神史的理念史的諸研究と区別して、「政治的學校史」(politische Schulgeschichte)と称している。議会制民主主義制度が成立した下で、それを肯定し評価した社会民主主義者たちがドイツ国(Reich)とプロイセンにおけるそれぞれの議会において、ワイマール憲法の教育条項の制定過程、ドイツ国学校法案(Reichsschulgesetzentwurf)の作成過程、そして諸々の学制改革問題にどのように関与し影響を及ぼしていったかを追求している。その際、SPDによる学制の根本的改革を求める努力と、SPDの学校政策の現実場面における改良主義的な試みとの相互関係の解明に考察の力点が置かれている。ワイマール共和国に時期を設定した本書の内容構成は、社会民主主義の学校政策の構造的條件(第1章)、教会と学校をめぐる対立(第2章)、教育機会の拡充のための努力(第3章)、学校の政治的方向性をめぐる対立(第4章)となっている。ワイマール時代の社会民主主義による教育政策および学制改革の分野での努力の過程を把握しようとする著者は、東ドイツの教育史研究者たちが社会民主主義の教育政策をめぐる努力を一面的にしか評価していないと批判する。ただ、本書においてKPDやUSPDの教育政策に対する批判に、やや主観が入っているのも否めないのではなかろうか。

- (5) Norbert Schwarte: Schulpolitik und Pädagogik der deutschen Sozialdemokratie an der Wende vom 19. zum 20. Jahrhundert. Böhlau Verlag. S. 514. 1980.

著者は本書の最初の章で、教育学における歴史研究の問題点を論じ、精神科学的・解釈学的な伝統を受け継いだ教育学の研究手法や研究対象を批判し、社会史的な研究の意義を説いている。それと同時に、労働運動の中で創出された教育思想や教育政策をマルクス・レーニン主義の立場から考察する東ドイツの研究物に対して一定の評価をしながらも、党派性と科学性の結合原理の適用が、第二次世界大戦前の社会民主主義の政治的教育的行動の諸条件を事実にして分析するのを妨げている、と批判する。さらに新左翼の教育理論が社会主義の教育概念を単純に類型化している問題点も指摘している。第2章および第3章を通じて著者は、19世紀中葉から第一次世界大戦中までの社会民主主義の教育思想史と教育政策史において、その節となるものを選び出して、社会的経済的状况との関連もふまえて考察し、それぞれについて著者自身による評価を加えている。

第2章では、19世紀における社会民主主義の理論上および教育政策上の立場を論じており、具体的にはマルクスとエンゲルスの教育概念、W. リープクネヒトとA. ベーベルの教育思想と教育政策、R. ザイデル(Seidel)の労働教育の概念、エルフルト綱領の教育要求とその問題点、第2インターのロンドン会議における教育問題と児童労働保護等々を取り上げている。第3章では、20世紀初頭の社会民主主義の教育理論上、教育政策上および教育実践上の立場をテーマにして、まず社会的経済的状况と教育政策遂行との関連、次いで労働と教育の結合という思想の歴史的展開過程、教育立法に対する社会民主主義の努力の過程、社会民主主義の学校綱領、社会主義の教育等について論及している。

- (6) Werner Wendorff: Schule und Bildung in der Politik von Wilhelm Liebknecht. Ein Beitrag zur Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung im 19. Jahrhundert. Colloquim

W. リープクネヒト (1826-1900) は、マルクスやエンゲルスとも交友があり社会民主主義労働者党の設立に貢献した人物で、エルフルト綱領の作成にもたずさわっている。「知は力であり、力は知である」と認識する彼は、ドイツ教育制度の階級性およびプロイセンの学校の状態を一貫して手厳しく批判した。本書は、19世紀におけるドイツ労働運動の中心的な指導者の一人であったこのW. リープクネヒトの青年時代から晩年に至るまでの、社会主義的な教育思想と教育政策の発展に力を尽したその足跡を、労働運動や社会状況との関連の中で考察している。

- (7) Paul Mitzenheim : Die Greilsche Schulreform in Thüringen. Die Aktionseinheit der Arbeiterparteien im Kampf um eine demokratische Einheitsschule in den Jahren der revolutionären Nachkriegskrise 1921-1923. Friedrich-Schiller-Universität Jena. S. 127. 1965.

チューリンゲン邦では、1921年にSPDとUSPDの共同政権が誕生し、次いで1923年にはSPDとKPDの共同政権が誕生する。著者は、この二期にわたる労働党政権の下で、M. グライル (Greil) 文相を中心にして活発に展開された一連の教育改革を、当時の緊迫した政治情勢や労働運動、教育運動等と関連づけながら考察している。チューリンゲン邦はワイマール憲法の教育条項を尊重して統一学校制度を実現した唯一の邦であり、著者によって、革新政権下のチューリンゲン邦の教育改革の全体像が初めて明らかにされた。

- (8) Hans Brumme (Ausgewählt): Wilhelm Liebknecht. Wissen ist Macht-Macht ist Wissen und andere bildungspolitisch-Pädagogische Äußerungen. Volk und Wissen Verlag. S. 231. 1968.

本書は東ドイツの教育史研究者 H. ブルメが編集したもので、最初に W. リープクネヒトの生涯と業績についての解説がなされ、次に、教育問題に関して W. リープクネヒトが行った演説や報告、それに寄稿論文などが約60点近く掲載されている。

- (9) Gerd Hohendorf (Eingeleitet und Erläutert): Clara Zetkin. Revolutionäre Bildungspolitik und marxistische Pädagogik. Ausgewählte Reden und Schriften. Volk und Wissen Verlag. S. 478. 1983.

第一次世界大戦直前、H. シュルツがSPD右派に転じた後もSPD左派として活動を続け、11月革命直後にはKPD創立に尽力し、ワイマール時代を通じてKPDを代表する理論家の一人であったC. ツェトキンの生涯と、彼女の業績について著者は解説し、彼女の論文や演説、報告等を約100点ほど収録している。なお、C. ツェトキンに関する文献は東ドイツにおいて多数見受けられる。

- (10) Rudi Schulz (Ausgewählt, Eingeleitet und Erläutert): Wilhelm Pieck. Zur Bildungspolitik der Arbeiterbewegung. Reden und Schriften. Volk und Wissen Verlag. S. 384. 1981.

W. ピークは第一次世界大戦前、H、シュルツや C. シェトキンらと共に教育の分野で理論・啓蒙活動に従事していたが、KPDの創立にも加わり、東ドイツ建国後、初代大統領になった人物である。本書は、ドイツ労働運動において彼が果たした教育学上および教育政策上の役割と意義を解説し、彼の著わした論説や、演説、講演、書翰などを、1906年から1959年までの分について選り掲載している。KPD創立以前のもは18点収められている。本書のほかに、W. ピークの著作集全4巻や伝記なども出版されている。

- (11) Stephan Voets (Hrsg.): Sozialistische Erziehung. Texte zur Theorie und Praxis. Hoffmann und Campe. S. 240. 1972.

- (12) Helmwart Hierdeis (Hrsg.): Sozialistische Pädagogik im 19. und 20. Jahrhundert. Julius Klinkhardt. S. 210. 1973.

- (13) Hans-Wolf Butterhof: Wissen ist Macht. Widersprüche sozialdemokratischer Bildungspolitik bei Harkort, Liebknecht und Schulz. Ehrenwirth. S. 133. 1978.

- (14) Karl-Heinz Günther und andere (Redaktion): Geschichte der Erziehung. Volk und Wissen Verlag.

- (15) Karl-Heinz Günther und andere (Ausgewählt): Quellen zur Geschichte der Erziehung. Volk und Wissen Verlag.

(11)と(12)は、いずれとも SPD そのものを対象とはしていないが、(11)は社会主義的教育学の資料を歴史的に幅広く精選しまとめたものである。R. オウエン(Owen)、マルクス、エンゲルス、フォイエルバッハ、W. リープクネヒト、マンハイム趣意文、K. ドゥンカー(Dunker)等が列挙され、西ドイツのSPDの資料も若干収められている。(12)も(11)と同じ類の本であり、O. リューレ(Rühle)、M. アドラー(Adler)、P. エストライヒ(Oestreich)等の著書の抜粋、および両ドイツにおける社会主義的教育学の資料等も含まれている。(13)は、社会民主主義者であるF. ハルコルト(Harkort)、W. リープクネヒト、H. シュルツの三人の思想を原典の抜粋により紹介している。(11)、(12)、(13)のいずれも資料集というべき性質の本である。(14)と(15)はともに東ドイツにおいて初版以来、版を重ねている、ドイツ教育史研究の入門書として重要な基本的文献である。(14)は、SPDの教育学と教育政策をドイツ教育史全体の中で鳥瞰を試みる場合にも参考になるであろう。しかしその際、SPDの改良主義・修正主義に対する本書の批判・評価の仕方については、西ドイツの教育史研究者による異論と批判にも耳を傾ける必要があるであろう。

なお、上述した著書のうち、(2)、(3)、(4)、(5)および(6)はそれぞれ学位論文を基にして執筆されている。(2)と(6)は Dissertation を、(3)と(5)は Inaugural-Dissertation を、そして(4)は Habilitationsarbeit を土台にしている。

II. 寄稿論文、学位論文

SPD の教育学および教育政策に関わりのある論文の数は、東ドイツの方が西ドイツに比べてやはり多い。学位論文 (Dissertation や Habilitation など) については、先述したように多少手を加えて出版されることもあるし、学術誌に掲載されることもある。公刊されていない学位論文を日本で入手するのは少々の困難を伴う。以下、まず東ドイツの教育雑誌 “Pädagogik”、学術年報 “Jahrbuch für Erziehungs- und Schulgeschichte”、および学術誌 “Monumenta Paedagogika” に掲載された、SPD に関係のある寄稿論文を列挙してみる。

〔“Pädagogik” に掲載された寄稿論文〕

- (1) Leo Regener : Das Bebel-Telegram. 1956. S. 13-S. 25.
- (2) Gerd Hohendorf : August Bebel über den Zustand des Schulwesens in Deutschland um 1900. 1956. S. 328-S. 345.
- (3) Gerhard Schreiber : Heinrich Schulz. Sein ideologischen und politischen Standpunkt auf dem Parteitag der Sozialdemokratischen Partei 1906 zur Mannheim. 1957. S. 110-S. 118.
- (4) Rosemarie Walther : Clara Zetkin—Repräsentantin der pädagogische Anschauung der deutschen Arbeiterklasse im ersten Viertel des 20. Jahrhundert. 1957. S. 507-S.521.
- (5) Herbert Londershausen : Die Grundung der KPD—eine entscheidende Wende in der Schulpolitik der deutsche Arbeiterklasse. 1958. S. 854-S. 869.
- (6) Gerd Hohendorf : Die Schulpolitik der deutschen Arbeiterklasse in der Novemberrevolution 1918. 1958. S. 776-S. 806.
- (7) Gerd Hohendorf : Von der Idee zur Gestaltung der sozialistische Schule. 1964. S. 22-S. 32.

〔“Jahrbuch für Erziehungs- und Schulgeschichte”に掲載された寄稿論文〕

- (8) Fritz Hammerschmidt : Entstehung und Entwicklung der ersten Jugendzeitschriften der deutschen Arbeiterjugendbewegung vor dem ersten Weltkrieg. Jg. 2. 1962. S. 133-S. 216.
- (9) Ernst Eichler : August Bebel über die Rolle der Arbeiterbildungsverein und über sozialistische Schulpolitik. Jg. 3. 1963. S. 119-S. 138.
- (10) Hans Brumme : Über die Darstellung der Schulpolitik und Pädagogik der Arbeiterbewegung in der Lehrbüchern zur Geschichte der Pädagogik und Schriften zur Erziehungsgeschichte. Jg. 3. 1963. S. 139-S. 189.
- (11) Johannes Schenk : Zur politischen und pädagogischen Position von Heinrich Schulz in der Novemberrevolution 1918. Jg. 4. 1964. S. 135-S. 165.
- (12) Artur Koch : Die Verwirklichung sozialistischer Kindererziehung mit Hilfe der ersten deutschen proletarischen Kinderzeitschrift „Für unsere Kinder“ (1905-1917). Jg. 7. 1967. S. 47-S. 131.
- (13) Gotthold Krapp : August Bebel über Erziehung und Schule im Sozialismus. Zur bildungspolitischen und pädagogischen Bedeutung von Bebels Hauptwerk „Die Frau und der Sozialismus“. Jg. 21. 1981. S. 47-S. 55.

〔“Monumenta Paedagogika”に掲載された寄稿論文〕

- (14) Hans Lemke : Einheitsschulbestrebungen der revolutionären deutschen Arbeiterbewegungen in der Novemberrevolution und der revolutionären Nachkriegskrise 1918 bis 1923. Band. IV. 1968. S. 118-S. 181.
- (15) Karl-Heinz Zieris : Der Kampf um die Trennung von Schule und Kirche und für die Weltlichkeit des Schulwesens in der Novemberrevolution und der revolutionären Nachkriegskrise 1918-1923. Ebenda. S. 182-S. 243.

(3)は、H. シュルツ研究の先駆的な労作と言えよう。(6)は、ワイマール期の教育政策研究には欠かせない重要な論文である。(1)、(2)、(9)、(13)は、A. ベーベルについての資料解説および論文である。(10)は、H. シュルツの11月革命期における思想と行動を追求している。(12)は、SPDの機関誌「平等」(Gleichheit)の付録として編集された雑誌「私たちの子どものために」(Für unsere Kinder 1905-1917)を手

がかりにして、プロレタリアの子ども保育、教育、文化などについて、当時 SPD が婦人労働者や主婦を対象に行った啓蒙・教育活動を追求し考察している。従来、ドイツの統一学校運動の研究と言えば、教員団体や教育学者たちが主張し展開した統一学校思想および学校改革運動が考察対象にされていたが、(14)は、そうした統一学校運動も視野に入れながら、労働運動や革命運動の中で創造された統一学校思想と、その実現のための努力の過程を追求し考察している。本論文は、ドイツ統一学校運動研究に新たな地平を切り拓いた労作である。(15)は、11月革命前後の時期における学校と教会の分離、学校制度の世俗性をめぐる闘争を究明している。

先に記した論文のうち、(10)は、Habilitation を、(12)、(14)、(15)は、それぞれ Dissertation を基にして執筆している。

〔未公開の学位論文〕

未公開の論文で、そのタイトルから判断して SPD に関係した内容を含んでいる、と推定し得るものは特に東ドイツの場合数多い。ここでは特に SPD の教育思想、教育政策等を直接研究対象にしている論文 3 点のみ（いずれも筆者が入手したもの）を挙げてみた。

(16) Johannes Schenk : Das schulpolitische Versagen von Heinrich Schulz. Eine Studie zur Theorie und Praxis der reformistischen Bildungspolitik. 1966.

(17) Brigitte Schulz : Zum Kampf der revolutionären deutschen Sozialdemokraten um die Weiterentwicklung und Verteidigung des Prinzips der Einheitlichkeit des Schulwesens vor und speziell während des ersten Weltkrieges. 1980.

(18) Werner Lesanovsky : Die Darstellung der Positionen August Bebels zur Bildungspolitik, Bildung und Erziehung und ihre Widerspiegelung im bildungspolitische Kampf (1860-1913). 1985.

(16)の論文は、H. シュルツの教育学研究および教育政策活動の歩みを、19世紀末から1923年頃までに時代設定し、H. シュルツの生い立ちから社会主義理論への目醒め、SPD への入党、SPD 左派として社会主義的教育思想および教育政策の創造と発展そして普及に活躍した時期、SPD 右派への変質過程、第一次世界大戦期に戦争遂行のための教育を唱導した時期、教育の様々な分野で SPD の改良主義的な教育政策を推し進めたワイマール初期等々を節目にして詳細に究明し、彼の業績を批判的に考察している。(17)の論文は、学制の統一性の原理を、マルクス主義的教育政策の原理の一つとして捉え、P. ナトルプ、G. ケルシェンシュタイナー等の統一学校概念を批判し、さらに右翼社会民主主義の統一学校要求を批判し、そして革命的社会民主主義の統一学校概念の優位性を際立たせている。本論文の、やや性急な判断や評価をしている個所が、少々気にかかる。(18)は、ドイツ労働運動の指導者として著名な A. ベーベルの、教育学と教育政策の分野における活躍とその業績を詳細に究明した労作である。

Ⅲ. 史 料

SPD の教育政策史研究という性格からして、史料は純粋に教育学関係のものに留まることは決してなくて、SPD および様々な労働運動団体やその指導者たちが出版した各種の機関誌紙、党大会議事録、ドイツ国および各邦国家における議会議事録等も研究上の重要な史料の内に含まれる。ここでは、日本においても直接的或いは間接的に入手或いは閲覧が可能と思われる、SPD 関係の史料に限定していくつか列挙してみたい。

- (1) Protokoll über die Verhandlungen des Parteitages der Sozialdemokratischen Partei Deutschlands. 1892-1915.
- (2) Protokoll über die Verhandlungen des Parteitages der Sozialdemokratischen Partei Deutschland. 1917-1939.
- (3) Die Neue Zeit. Zeitschrift der deutschen Sozialdemokratie. 1883-1923.
- (4) Karl Liebknecht: Gesammelte Reden und Schriften. 9 Bände. Dietz Verlag. 1960-1971.
- (5) August Bebel: Ausgewählte Reden und Schriften. Bde. 1, 1/2, 2/2, 6. Dietz Verlag. 1983.
- (6) August Bebel: Aus meinem Leben. Dietz Verlag. 1980.
- (7) Die Reichsschulkonferenz. Ihre Vorgeschichte und Vorbereitung und ihre Verhandlungen. 1920.
- (8) Sozialistische Monatshefte. 1895-1933.
- (9) Gleichheit. 1892-1917.
- (10) Glocke. Wochenschrift für Politik, Finanz, Wirtschaft und Kultur.
- (11) Monumenta Paedagogika. Band. XXI. Dokumente zur Bildungspolitik und Pädagogik der deutschen Arbeiterbewegung. 1982.
- (12) Monumenta Paedagogika. Band. XXIII. Dokumente zur Bildungspolitik und Pädagogik

der deutschen Arbeiterbewegungen. 1985.

(13) Vorwärts. Zentralorgan der SPD. 1919-1933.

(1)と(2)は、SPDの党大会の議事録である。(3)、(9)、(10)、(13)は、いずれもSPDの理論・討論誌であり、教育関係の論文も多数掲載されており、SPD研究にとって第一級の史料である。(4)と(5)は、それぞれK. リープクネヒトおよびA. ベーベルの講演や著作などを集録したものである。(5)はまだ出版は完結していない。(8)は、SPDの国際評論誌であり教育関係の論文や評論も掲載されている。(9)は、「婦人労働者の利益のための雑誌」として、SPD指導部の下にC. ツェトキンが編集出版した社会主義婦人運動の機関誌である。「平等」と題するこの機関誌には、「母親と主婦のために」および「私たちの子どものために」というタイトルの二種類の付録が添えられた。いずれも教育関係の論文が数多く掲載されている。「平等」およびこの二種の付録に掲載された教育関係の論文・評論のうち、C. ツェトキンが執筆したものについては、彼女の選集などによって今日、見ることができる。なお、C. ツェトキンについては、伊藤セツ著「クララ・ツェトキンの婦人解放論」と題する浩瀚な邦文研究書が出版されている(有斐閣1984)。(10)は、SPD党員、Parvusによって出版された、政治・財政・経済・文化に関する機関誌である。教育・文化問題に関する時事的な論文・記事も掲載されている。(11)と(12)は、いずれもドイツ労働運動における教育政策に関する史料を集録したものである。両者ともに史料の概説を載せている。(13)は、SPDの中央機関誌であり、SPD研究の第一級の史料である。

〔付記〕

以上、列記または解題した著書、論文、史料等のうち、Iの(1)、(2)、(7)、(8)、(9)、(10)、(14)、(15)、IIのすべての論文、IIIの(4)、(5)、(6)、(11)、(12)は、いずれも東ドイツにおける教育史研究者の手になるものであり、Iの(3)、(4)、(5)、(6)、(11)、(12)、(13)は、西ドイツにおける教育史研究者のものである。なお、下記の寄稿論文は、東西両ドイツの教育史研究者からしばしば引用されている論文であり、H. シュルツの生涯にわたる活動と業績を追求した論文として貴重な労作と思われるが、筆者は未だ入手していない。

- (14) Heinrich Wulff: Heinrich Schulz 1872-1932. Ein Leben im Spannungsfelde zwischen Pädagogik und Politik. In: „Bremisches Jahrbuch“ Hrsg. von der Historiker-Gesellschaft zu Bremen. Band. 48/1962, Schünemann-Verlag. S. 319-S. 374.